

校長室の窓から見える景色が、白銀の世界に変わった。冬が来た。厳しい冬の到来である。「厳しい」という言葉の対義語の一つに「優しい」という言葉がある。「優しい」という言葉を知らない人はいないであろう。しかし、「本当の優しさとは何だろう」と考えたことがある人はいる気がする。少なくともその内の一人は私である。自問自答を繰り返す中で、とある作家の言葉と出遭うことになる。太宰治である。「人間失格」や「斜陽」、「走れメロス」、「ヴィヨンの妻」などを書いた人である。その言葉は小説の一節ではなく、友人に宛てられた書簡の中にあった。

太宰は、その書簡の中で、「優しい」という字について、次のように綴っている。

「・・・この字をよく見ると、人偏に憂ふると書いてみます。人を憂へる、ひとの淋しさ侘しさ、つらさに敏感な事、これが優しさであり、また人間として一番優れてゐる事ぢゃないかしら、さうして、そんな、やさしい人の表情は、いつでも含羞（はにかみ）であります。・・・」

この箇所の前後を読むと、弱者に寄り添う「優しさ」が描かれている。そしてその優しさそのものが、滅びゆくものであるという太宰の意識も感じることができる。また、自身のことを「滅亡の民」と表現していることも印象的であった。学生の頃、少なからずこの書簡の内容に、私の心は揺さぶられた。社会から見れば、まだまだ弱者である自分には、痛い言葉であった。自分の存在が何者なのか、何者になり得るのかなど、分からない頃でもあった。同時に、

「自分の弱さを認めること、そして向き合うことが、優しさの本質だよ」と語りかけているようにも感じた。少しだけ、心が軽くなった気がしたことを覚えている。

誰かが言った「傷つくことが怖いから、人に優しくするんだよ」
少なくともこの「優しさ」は偽りの優しさに思えた。

この書簡が書かれたのは、昭和21年4月30日。第二次世界大戦の終戦から1年程経過した頃である。そして、太宰が亡くなる2年程前ということになる。時代背景も影響していると思われる。まだまだ混沌とした時代であった。

そもそも、「優しい」とは、どういう言葉なのだろうか。辞書で語源を調べてみた。いにしえの日本において「優し(い)」の意味は「他人の目が気になって、身も痩せ細るほどつらい」がもとになっているとされている。時の流れの中で、言葉の意味も変わっていくこととなる。「つらい」から、「恥ずかしい」や「気が引ける」という意味になり、その状態がつつましやかなことから、「しとやか」や「優美」の意味となっていった。つまり、自分自身が「つらい」という意味から、遠慮してして気を遣う様子を「自分が恥ずかしくなるほど(相手が)上品だ。優雅だ。」と解釈するようになった。重要なのは、自分ではなく「相手」の性質を示す用法に変化していったこと、視点の変化である。

現代も同じである。言葉は時代とともに変わり、価値観やものの見方も変わる。

少なくとも、誰にとっての優しさなのかということは、変わらず大切にしたいものである。

余談だが、とあるロックバンドは、そのストレートな歌詞で

「やさしさだけじゃ 人は愛せない」

と歌っている。考えさせられるフレーズである。

ふと、我にかえる。いつもと変わらない、穏やかな時が流れている。窓の外には、柔らかな陽の光をあびた粉雪が、いとしめやかに「やさしく」降っていた。